

# 温水プール利用者の特性と利用決定要因に関する研究

ケアポートみまき・温泉アクティブセンターを事例にして

○徳田 つづる（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

上岡 洋晴（東京農業大学地域環境科学部教養分野）

岡田 真平（身体教育医学研究所）

本多 卓也（東京大学教育学部身体教育学コース）

## 1. 対象施設

長野県東御市（旧北御牧村）は地域の急速な高齢化に備えて保健・医療・福祉の拠点施設を必要とし、平成7年4月に日本財団（旧：財団法人日本船舶振興会）の事業助成を受けて、高齢者総合福祉施設「ケアポートみまき」を開所させた。ケアポートみまきは、対象施設の「温泉アクティブセンター」に加え、市立温泉診療所（医療）や市健康福祉部（保健）、特別養護老人ホーム（福祉）、デイサービスセンター、ヘルパーステーション、訪問看護ステーションなどを有している。

その中でも健康増進部門を担うのが「温泉アクティブセンター」であり、高齢者福祉施設と地域住民との交流の場として、また、リハビリテーションや健康づくりの場としての役割がある。

平成18年6月1日現在、会員数1143名、非会員を含め1日平均430名の人々が利用している。会員は50～60歳代が多いが、子どもから高齢者まで幅広い年齢の人々に利用されている。

## 2. 目的

本研究は、子どもから高齢者、障害者からスポーツ選手まで、多くの人々に利用されている「温泉アクティブセンター」を事例とし、利用者の特性と利用決定要因を明らかにすることを目的とした。

## 3. 調査方法

調査期間は、平成18年8月29日から9月3日の6日間で、午前11時から午後21時40分（土曜日と日曜日は21時）までの時間帯に、無作為抽出法※により被験者を決定し、面接でのアンケート調査を行った。

調査項目は利用目的、利用頻度、滞留時間、教室参加の有無など47項目だった。倫理面への配慮として、被験者は同意のあった者だけを対象とし無記名回答とした。また、事前に東京農業大学総合研究所へ「人に関する実験・研究計画書」を提出して承認を得た。

※調査者による選択バイアスを除去することを目的として、営業時間内の00分、20分、40分に時刻を定め、プール利用後、その時刻から一番始めに更衣室から出てきた者に対して実施した。

#### 4. 結果と考察

6日間で195名にアンケートを依頼し、男性76名(47%)、女性86名(53%)の計159名から回答を得た(回答率82%)。年代は10歳代未満6名(4%)、10歳代5名(3%)、20歳代3名(2%)、30歳代7名(4%)、40歳代10名(6%)、50歳代42名(26%)、60歳代55名(35%)、70歳代25名(16%)、80歳代6名(4%)で50歳代~60歳代が多かった。会員が130名、非会員が29名であった。

利用理由としては「健康のため」が89名(55%)、「リハビリ」が25名(16%)、「泳力向上」が15名(9%)、「ダイエット」が12名(8%)、「くつろぐため」9名(6%)、その他「紹介された」が6名(4%)、「コミュニケーション」が3名(2%)であった。

利用頻度は、週6日が29名(18%)、週5日が20名(13%)、週4日が26名(16%)、週3日が32名(21%)、週2日23名(14%)、週1日が15名(9%)、週1日未満が14名(9%)だった。

滞留時間は、1時間が41名(26%)、1.5時間が58名(36%)、2時間が43名(27%)、2.5時間が11名(7%)、3時間が5名(3%)、最も長かったのは4時間が1名(1%)だった。

料金に対する質問では、45名(28%)が「とても安い」、57名(35%)が「安い」、39名(25%)が「どちらでもない」、16名(10%)が「安くない」、2名(1%)が「全く安くない」だった。

また「スタッフの親切さ」を5段階評価してもらったところ「とてもそう思う」が96名(60%)、「そう思う」が54名(34%)、「どちらでもない」が9名(6%)、「そう思わない」「全くそう思わない」が0名だった。

温泉アクティブセンター内には30.5℃の25mプールを始め、42℃の全身浴プール、32℃の歩行専用流水プール、寝湯・打たせ湯のある37℃のリラクゼーションプール、ドライサウナ・スチームサウナなど様々な種類のプールがあり、利用方法も泳ぐ、歩く、教室に参加する、サウナで汗を流すなど様々である。運動方法が制限されないことや、スタッフが親切だという意見が多いことも中高年層が多く利用する理由だと考えられる。しかし、クロス集計や多変量解析をまだ行っておらず、現段階ではこれが議論の限界である。

#### 5. 結論

分析の中間段階であるがプール内での利用方法が多様であり、スタッフが親切であることが多くの者に利用される理由だと推察される。今後、利用要因を定量化するために、細かな分析を進める必要がある。